

森
鷗
外

普
請
中



普
請
中

渡辺参事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。

雨あがりの道の、ところどころに残っている水溜まりみずたを避けて、木挽町こびきちょうの河岸かしを、逡巡省ていしんしょうの方へ行きながら、たしかこの辺の曲がり角に看板のあるのを見た筈はずだがと思いながら行く。

人通りは余り無い。役所帰りらしい洋服の男五六人のがやがや話しながら行くのに逢あった。それから半衿はんえりの掛かった著物を著た、お茶屋の姉えさんらしいのが、何か

近所へ用達しにでも出たのか、小走りに摩れ違った。まだ幌を掛けたままの人力車が一台跡から駈け抜けて行った。

果して精養軒ホテルと横に書いた、割に小さい看板が見附かった。

河岸通りに向いた方は板囲いになっていて、横町に向いた寂しい側面に、左右から横に登るようになっていて、階段がある。階段は尖を切った三角形になっていて、その尖を切った処に戸口が二つある。渡辺はどれから這入るのかと迷いながら、階段を登って見ると、左の方の戸

口に入口と書いてある。

靴が大分泥だいぶになっているので、丁寧に掃除をして、硝ガラ子戸スドを開けて這入った。中は広い廊下のような板敷で、ここには外にあるのと同じような、棕櫚しゅろの靴拭くつぬぐいの傍に雑巾ぞうきんが広げて置いてある。渡辺は、己おれのようなきたない靴を穿はいて来る人が外にもあると見えると思いつながら、又靴を掃除した。

あたりはひっそりとして人気がない。唯ただ少し隔たった処から騒がしい物音がするばかりである。大工が這入っているらしい物音である。外に板囲いのしてあるのを思

い合せて、普請最中だなと思う。

誰も出迎える者がないので、真直まっすぐに歩いて、衝つき当たって、右へ行こうか左へ行こうかと考えていると、やつとの事で、給仕らしい男のうろついているのに、出合った。

「きのう電話で頼んで置いたのだがね」

「は。お二人さんですか。どうぞお二階へ」

右の方へ登る梯子はしごを教えてくれた。すぐに二人前の注文をした客と分かったのは普請中殆ほとんど休業同様にして
いるからであろう。この辺まで入り込んで見れば、ます
ます釘くぎを打つ音や手斧ちようなを掛ける音が聞えて来るのであ

る。

梯子を登る跡から給仕が附いて来た。どの室かと迷つて、背後うしろを振り返りながら、渡辺はこう云った。

「大分賑にぎやかな音がするね」

「いえ。五時には職人が帰ってしまいますから、お食事
中騒々しいようなことはございません。暫しばしくこちらで」

先へ駈け抜けて、東向きの室の戸を開けた。這入つて見ると、二人の客を通すには、ちと大き過ぎるサロンである。三所に小さい卓が置いてあつて、どれをも四つ五つ宛の椅子いすが取り巻いている。東の右の窓の下にソファ

もある。その傍そばには、高さ三尺ばかりの葡萄ぶどうに、暖室で大きい実をならせた盆栽が据えてある。

渡辺があちこち見廻していると、戸口に立ち留まっていた給仕が、「お食事はこちらで」と云って、左側の戸を開けた。これは丁度好い室である。もうちゃんと食卓が拵えて、アザレエやロドダンドロンを美しく組み合わせた盛花もりばなの籠かごを真中にして、クウヴェエルが二つ向き合せて置いてある。今二人位は這入れよう、六人になった。少し窮屈きうくつだろうと思われる、丁度好い室である。

渡辺は稍癡や満足やしてサロンへ帰った。給仕が食事の室

から直ぐに勝手の方へ行つたので、渡辺は始てひとりになつたのである。

かなづち金槌や手斧の音がぱったり止んだ。時計を出して見れば、なるほど成程五時になっている。約束の時刻までには、まだ三十分あるなと思ひながら、小さい卓の上に封を切つて出してある箱の葉巻を一本取つて、尖を切つて火を附けた。

不思議な事には、渡辺は人を待っているという心持が少しもしない。その待っている人が誰であろうと、殆ど構わない位である。あの花籠の向うにどんな顔が現れて

来ようとも、殆ど構わない位である。渡辺はなぜこんな冷澹れいたんな心持になつていられるかと、自ら疑うのである。

渡辺は葉卷の烟けむりを緩ゆるく吹きながら、ソファの角の処の窓を開けて、外を眺めた。窓の直ぐ下には材木が沢山立て列ならべてある。ここが表口になるらしい。動くとも見えなない水を湛たたえたカナルを隔てて、向側の人家が見える。多分待合まちあいか何かであろう。往来は殆ど絶たえていて、その家の門に子を負うた女が一人ぼんやりたたず佇たんでいる。右のはずれの方には幅広く視野を遮かきつて、海軍参考館の赤煉瓦あかれんががいかめしく立ちはたかっている。

渡辺はソファに腰を掛けて、サロンの中を見廻した。

壁の所々には、偶然ここで落ち合ったというような掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯うぐいすやら、浦島が子やら、鷹たかやら、どれもどれも小さい丈たけの短い幅ふくなので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻しりを端折はしよったように見える。食卓の拵はさえてある室の入口を挟はさんで、聯れんのような物の掛けであるのを見れば、某大教正の書いた神代文字じんだいもじというものである。日本は芸術の国ではない。

渡辺は暫く何を思うともなく、何を見聞みきこくともなく、唯烟草たばこを呑んで、体の快感を覚えていた。

廊下に足音と話声とがする。戸が開く。渡辺の待って
いた人が来たのである。麦藁むぎわらの大きいアンヌマリイ帽に、
珠数飾じゆずりをしたのを被かぶっている。鼠色の長い著物式の上
衣の胸から、刺繡ししゆうをした白いバチストが見えている。
ジュポンも同じ鼠色である。手にはヴォランの附いた、
おもちやのような蝙蝠傘こうもりがさを持っている。渡辺は無意識に
微笑を粧よそおってソファから起き上がって、葉巻を灰皿に
投げた。女は、附いて来て戸口に立ち留まっている給仕
を一寸見返ちよつとって、その目を渡辺に移した。ブリユネット
の女の、褐色の、大きい目である。この目は昔度度たびたび見た

ことのある目である。しかしその縁ふちにある、指の幅程な紫掛むらかった濃い暈かさは、昔無なかったのである。

「長く待たせて」

独逸語ドイツである。ぞんざいな詞ことばと不吊合ふつりあいに、傘を左の手に持ち替えて、おおように手袋に包んだ右の手の指尖ゆびさきを差し伸べた。渡辺は、女が給仕の前で芝居しげをするなど思いながら、丁寧ていねいにその指尖ゆびさきを撮とりまんだ。そして給仕にこう云った。

「食事の好い時はそう云ってくれ」
給仕は引ひつ込んだ。

女は傘を無造作にソファの上に投げ、さも疲れたようにソファへ腰を落して、卓にりようひじ両肘を衝いて、黙まって渡辺の顔を見ている。渡辺は卓の傍そばへ椅子を引き寄せ、据わった。暫くして女が云った。

「大そう寂しい内ね」

「普請中なのだ。さっきまで恐ろしい音をさせていたのだ」

「そう。なんだか気が落ち著かないような処ね。どうせいつだって気の落ち著くような身の上ではないのだけど」

「一体いつどうして来たのだ」

「おとついで来て、きのうあなたにお目に掛かったのだわ」
「どうして来たのだ」

「去年の暮からウラジオストックにいたの」

「それじゃあ、あのホテルの中にある舞台で遣っていたのか」

「そうなの」

「まさか一人じゃああるまい。組合か」

「組合じゃないが、一人でもないの。あなたも御承知の人が一しよなの」少しためらって。「コジンスキイが一

「しよなの」

「あのポラツクかい。それじゃあお前はコジンスカー
なのだな」

「嫌いやだわ。わたしが歌って、コジンスキイが伴奏をする
だけだわ」

「それだけではあるまい」

「そりゃあ、二人きりで旅をするのですもの。まるつき
り無しというわけには行きませんわ」

「知れた事さ。そこで東京へも連れて来ているのかい」
「ええ。一しよあたごやまに愛宕山に泊まっているの」

「好^よく放して出すなあ」

ベグライテン

「伴奏させるのは歌だけなの」 Begleiten という詞を使ったのである。伴奏ともなれば同行ともなる。「銀座であなたにお目に掛かったと云ったら、是非お目に掛かりたいと云うの」

「真^{まっぴら}平だ」

「大丈夫よ。まだお金は沢山あるのだから」

「沢山あったって、使えば無くなるだろう。これからどうするのだ」

「アメリカへ行くの。日本は駄目だって、ウラジオで聞

いて来たのだから、当あてにはしなくってよ」

「それが好いい。ロシアの次はアメリカが好かろう。日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ」

「あら。そんな事を仰おっしやると、日本の紳士がこう云つたと、アメリカで話してよ。日本の官吏がと云いましたよ。うか。あなた官吏でしょう」

「うむ。官吏だ」

「お行儀が好くって」

「恐ろしく好いい。本当のフィリステルになり済ましていい

る。きょうの晩飯だけが破格なのだ」

「難有ありがたいわ」さつきから幾つかの控鈕ボタンをはずしていた手袋を脱いで、卓越しに右の平手を出すのである。渡辺は真面目まじめにその手をしっかりと握った。手は冷たい。そしてその冷たい手が離れずについて、暈くまの出来たために一倍大きくなったような目が、じっと渡辺の顔に注がれた。

「キスをして上げても好くって」

渡辺はわざとらしく顔を蹙しかめた。「ここは日本だ」叩たたかずに戸を開けて、給仕が出て来た。

「お食事が宜よろしゅうございます」

「ここは日本だ」と繰り返しながら渡辺は起^たつて、女を食卓のある室へ案内した。丁度電燈がぱつと附いた。

女はあたりを見廻して、食卓の向側に据わりながら、

「シャンブル・セパレエ」と笑^{じょうだん}談のような調子で云つ

て、渡辺がどんな顔をするかと思うらしく、背伸びをして覗^{のぞ}いて見た。盛花の籠が邪魔になるのである。

「偶然似ているのだ」渡辺は平気で答えた。

シェリイを注^つぐ。メロンが出る。二人の客に三人の給仕が付き切りである。渡辺は「給仕の賑やかなのを御覽」と附け加えた。

「余り気が利きかないようね。愛宕山もやっぱりそうだわ」肘を張るようにして、メロンの肉を剥はがして食べながら云う。

「愛宕山では邪魔だろう」

「まるで見当違いだわ。それはそうと、メロンはおいしいことね」

「今にアメリカへ行くと、毎朝極きまって食べさせられるのだ」

二人は何の意味もない話をして食事をしている。とうとうサラダの附いたものが出て、杯にはシャンパンエが

注がれた。

女が突然「あなた少しも妬ねたんでは下さらないのね」と云った。チェントラアルテアアテルがはねて、ブリュウル石階の上の料理屋の卓に、丁度こんな風に向き合って据わっていて、おこったり、中直りをしたりした昔の事を、意味のない話をしていながらも、女は想い浮べずにはいられなかったのである。女は笑談のように言おうと心に思ったのが、凶らずも真面目に声に出たので、悔やしいような心持がした。

渡辺は据わったままに、シャンパニエの杯を盛花より

高く上げて、はつきりした声で云った。

コジンスキイ　ゾル　レエベン

"Kosinski soll leben!"

凝り固まったような微笑を顔に見せて、黙ってシャンパニエの杯を上げた女の手は、人には知れぬ程ふる顫っていた。

*

*

*

まだ八時半頃であった。燈火の海のような銀座通を横切って、ヴェエルに深くおもて面を包んだ女を載せた、一輛の寂しい車が芝の方へ駈けて行った。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館